

ございませぬかと門を開けて老婆「これはく松浦の若旦那様、よろこ御出で下さいませた光雄「爲子さんは居らつゝやるかね老婆「ハイお家に居つゝやいます光雄「松浦が参りませた、御差支へがないなら御會ひ下さいとどう言ておくれ老婆「ハイく畏りました一寸御待下されませと、爲子の前に行き老婆「松浦の若旦那様が御出でにありました爲子「婦人と二人連老婆「ハイなかく別品でございます爲子「ろうかね、御案内申えておくれ老婆「畏りましたと又出て来て老婆「サアどうぞ御通り下さいませ、と松浦奥に通ると、梅吉は後ろの方に小さくなつてついて行く光雄「御免下さい爲子「これはく松浦様、よう御尋ね下さいませた光雄「御近

所途用があつて参つた序に、一寸御伺ひ申えませした變りはございませぬか爲子「イエ別に變りはございませぬ梅吉「お嬢さん、先日はいろく世話ふなりました爲子「オヤお梅さんよく御出で下さいませした、私ころとんだ御厄介になりました光雄「誠に静かお住居で結構ですな爲子「ハイ餘り静かなので退屈致します光雄「ある程そうでせう、何をあすつて目を消しなさいませか爲子「何をするといふ事は赤く、氣に合ふた時は琴など弾じ、唯だブラくとして暮して居ります光雄「どうです、少々御考へがちがひは致せぬか爲子「考へど仰やるのは光雄「先非を御後悔おさりはませぬか爲子「自分で信じて致した事後悔する譯はございませぬ、と老婆菓子を出さ茶を汲で出すをうけて下に

置き 光雄「うれでは矢張り未練が爲子「ハイたどへどんな
 目に出會ふとも、私は千吉の妻でございます 光雄「教育のあ
 る御婦人にも、似合はない事を仰やる、知らぬ中は兎も角
 も一旦右様の不正の男と知たる上は潔よく御切れになる
 のが得策でせう 爲子「若くも初めにうういふやうな不正の
 人と知たなら、こんな事にもならなかつたのでせうが、其れ
 を知つたのはやうやく此頃、己でに身重小もなつたる私其
 やうな不實の事は出来ませぬ 光雄「貴女の仰やる事も、一應
 は尤もだがよく考へてござらんおさい、貴女は自由を放縦と
 誤解せ、父母の目をかすめて馬丁と私通え、遂に墮落をまて
 貴女たるべき品格を全く失墜えて社會道德の罪人となつ
 たのだ、貴女のこれ迄信じてお出でになつた所は、皆違つて

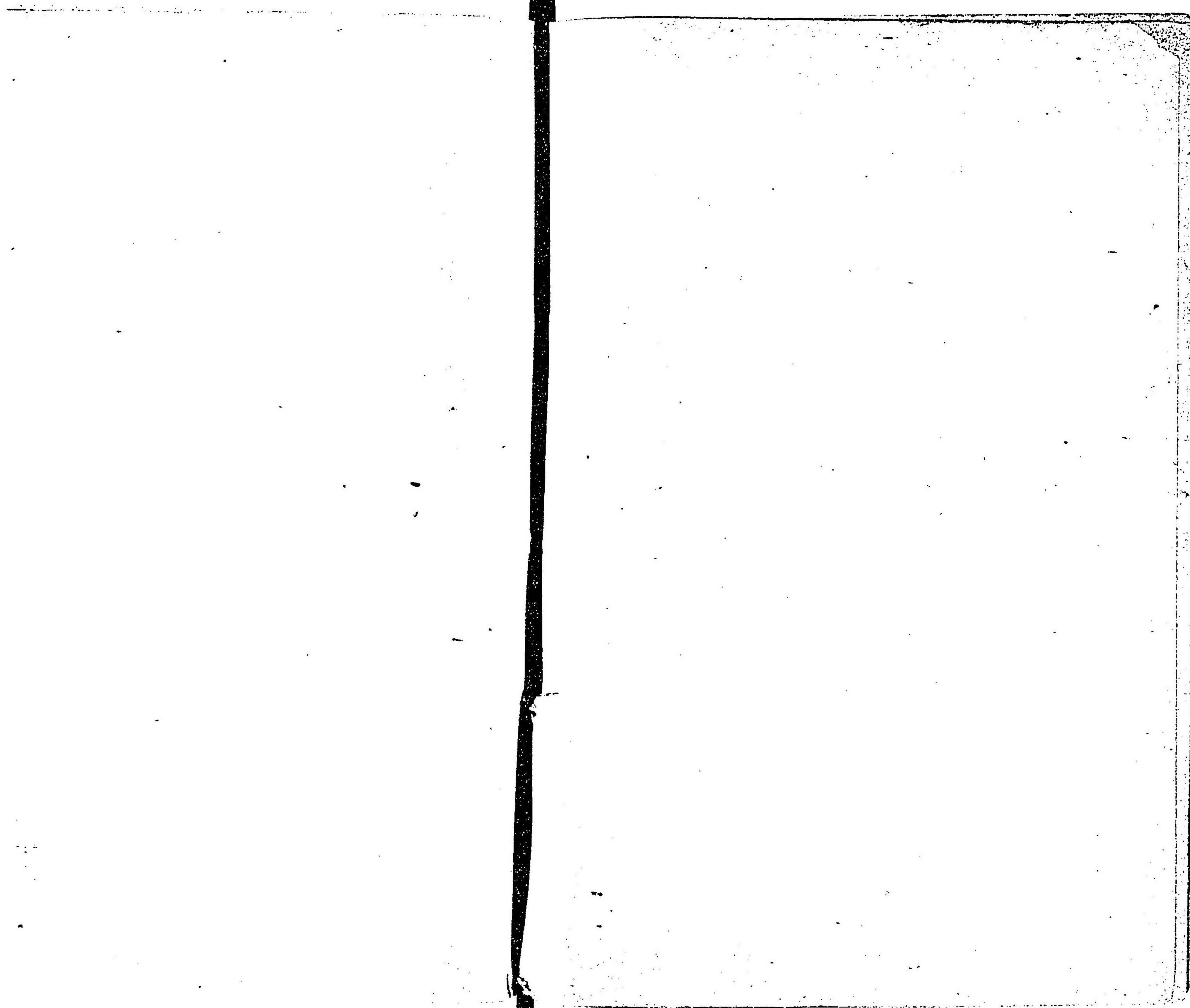
居たのだけれども此れを知らない中は仕方がない己に過
 失であつたといふ事に氣が着いた上、一刻も早く改めるの
 が順當じや非と知りつゝ、飽まで非を遂げやうとするのは
 甚だ宜ましくない事であると私は思ふが如何なるものでせう
 爲子「道理は成程そんなものでございませう、けれど私にも
 う道理の支配からは全く見捨てられたのでございませう
 オ「エ見捨てたのでございませう、千吉とア「なつた初から
 二人で家を出る時も、自分では己に悪事と知て居つたので
 ございませう、もう此時から、私は全く情の奴隷とあり果
 て、居たのです、うゑて初めは種々な空想も抱へて居りま
 したが、二人苦勞を與にゑてだんく世の實際が知れ、つら
 い切ない生活の狀態を知るにつれて、其空想も次第に消へ

唯だ浮氣の戀でなく、心底千吉がいとまゝあつて、たとへ無
 理な事があるとも又少しはうたれた、かれてもなる丈け
 其人の氣にさからぬやうに去て、一生離れまいといふ心
 になりまゐた、千吉も初めは、随分品行の正まきいふ心
 ない人であつたのです、其後は以前と變り浮氣な事もせ
 ず私を大切にしてくれ、其後は以前と變り浮氣な事もせ
 身に心配はございせん、其れを今更私の方から見捨て、
 は罪を再びする道理、は親切は有難うございませぬが私の心
 を推諒して下さいませ、光雄「若し親御が御許容にならない
 か、或ひは万一千吉の心が變つたら、如何なさいませぬ、爲子「親
 が許さなければ勘當して貰ひませぬ、又千吉の心が變るやう
 なるんな氣使ひはございませぬが、方に一そんな事がござ
 いませたら、私は尼になつて、一生寡婦で暮らします、お梅さん

とても、万更縁のない人ではなま、千吉の爲に惡がれがまど
 よもや思ひはなま、光雄「どうでももういふ御決
 心でございませぬか、爲子「ハイ、と決然としていふ、松浦は所詮
 望みおまといふ体にて、腕拱いて首うつぶくると、下女「遠だ
 まく、駭け來り、下女「お嬢様、寫眞をとり返しました、サア
 御褒美を下さいませ、と寫眞を出してせまる、爲子は「これ
 とつて爲子「今は御客様が御出でだから、御褒美は後程進げ
 るほしい物を考へてお置き、下女「もうチャーンと考へてあ
 りませぬ、成る丈けどうか現金に爲子「跡から上げるといふに
 下女「屹度でございませぬか、おまか下さらなければお婆さん
 に言付けて、又取上げちまいますよ、と出て行く、爲子は「手早
 く寫眞を手箱に納ようとする、光雄「どなたの寫眞でござい

ます、と爲子一寸ためらいしが、思ひ切つて爲子「千吉ので
 ございます、お梅さん、お目にかけてませうか梅吉「イエ、もうよ
 りまゆうとございますと顔を眞赤にまて返辭に得堪へぬ態
 松浦も少まムツとする光雄「うれじやアもう何も申上げま
 せん、いづれ又伺ひませう、ゆつくり御考へなさいませ
 いくら考へても、逆も私の心のかはる事はございませんか
 ら、其のためあらば、御出では必らず御然用でございます光
 雄「御暇致ます、爲子「アよろまいで、耳ございませんか、も
 う十二時でございませうから、何もございませんが、せめて
 御飯でも召上つて光雄「イヤ他に用事もございますから
 早速ながら御暇仕ります、と松浦梅吉、暇乞して出ると、爲子
 も起て爲子「お梅さん私は誠に淋まゆうとございますから、時

とございませう光雄「左やうなら、御邪魔を致まじたと二人
 の外に出て光雄「あれでは高山の望みもどうせ無益だ併し
 あのやうに心の堅固なのは、なか／＼感心だと爲子と顔見
 合せ、氣を變へては入ると爲子門の柱によりて跡を見送つ
 て居る、此所に老婆目を擦りながら出で来り老婆「御客様は
 もう御歸りになりましたか、ツイ午睡をまて、とんだ疎匆を
 いたまえた、といへど氣付かず、ハンケチの縁を齒に咬み
 て一方の縁を右手に握み爲子「浮世はうるさい、とべりく
 と引裂きものだねへと老婆は呆れて其顔を見つむる此れ
 にて幕、

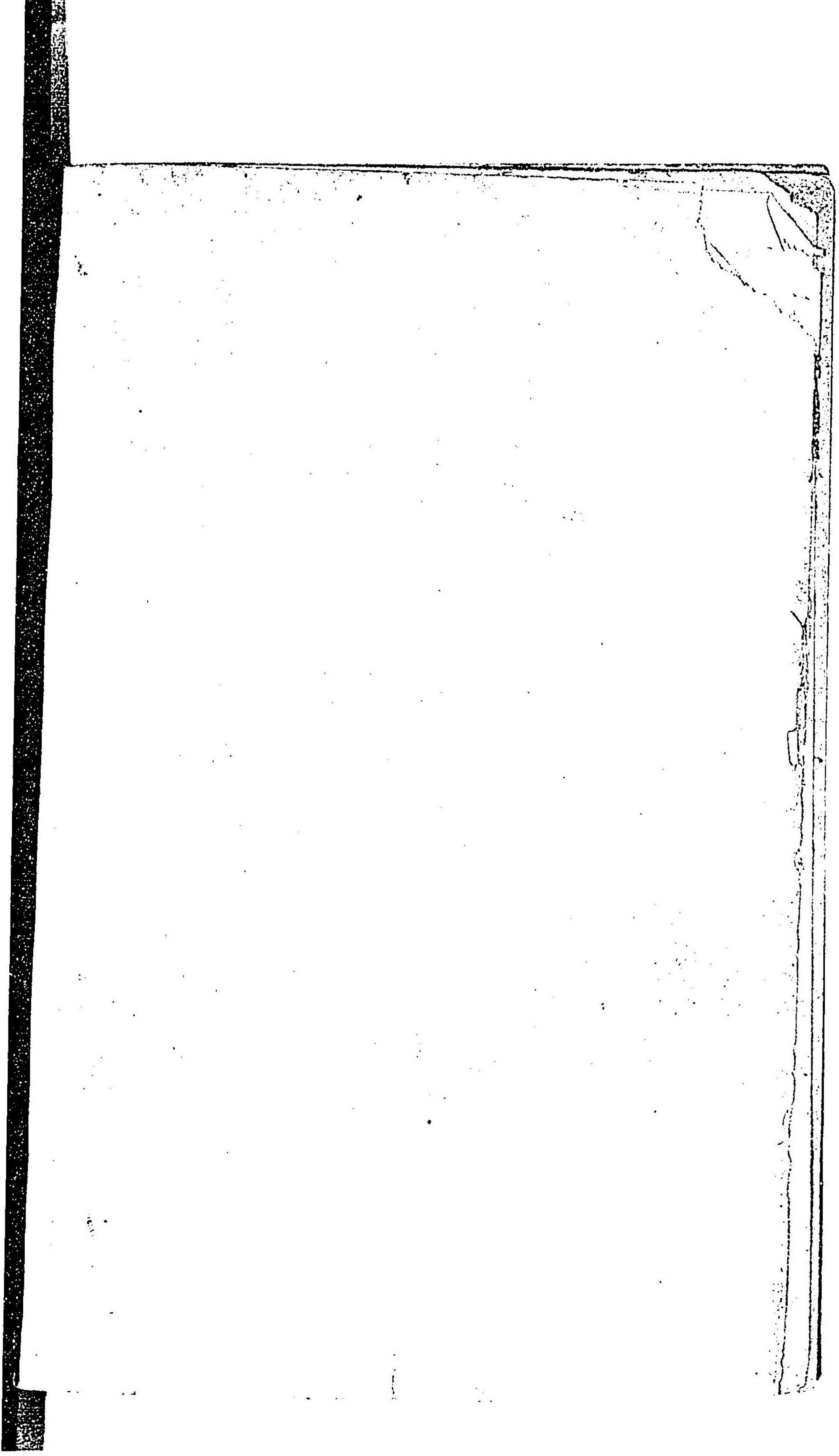


位俳
世優
松操藤仇浪(完)

明治十四年十二月廿五日即
今之 年十二月廿七日出版

印
刊
者
大
場
洗
美
印
行
者
岡
守
平
九
郎
印
行
所
山
本
山
所
在
地
全
日
本
柳
原
河
岸
十
三
号
也

四十六



088919-000-5

特11-616

松操藤の仇浪

川上 音二郎/著

M24

DBK-0103

